

昭和十七年

正月元旦 昨日迄のドンヨリした雪曇の空はカラリと晴れて一面の青空。まばゆいばかりの陽射で、元旦に相応しい日和である。

去る十二月八日対英米開戦の御詔勅下ってより、ここに二旬。大東亜戦争の真最中に迎える此の佳き日は吾れ等国民にとっては素晴らしい感激の日である。国民の胸から永遠に消え得ぬ日である。

午前四時札幌神社に●々たる降雪について／●は雨かんむりに非／詣でる。境内に焚かれた松樹の炬火は、その芳香をあたり一面に漂はせて、一しほ神々しさを感じさせる。出征せる兄の武運長久を祈願するのか、将又、征ける愛人の武運を祈るのか、彼方此方に麗人の緊張した顔も見られる。

午前十時式に出席。例年ならば講堂の外迄出席者が溢れてゐるのに、今日は講堂内も空いてゐる。三年目の居らぬのと、帰省者が増したためであろう。

一月二日 金曜、曇 別に変わった事もない。夕方、望月君が旅行先からお帰りになった。

一月三日、土曜、曇 三人で八時半頃雑煮を食べ、十時近く迄ストーブに當りながら喋った。山根君が十時十二分の列車でスキーに出かけたが、危うく列車に乗遅れるところだった。（遂にマニラが皇軍により無血占領された。大いに慶ぶべし）

一月四日、日曜 曇 ストーブの燃えが悪いので朝食後、煙筒を掃除した。昼近くに、山根君のところへいつも来る女の子が遊びに来たが、不在であるので、ストーブに當ってから帰って行った。午後十一時頃、望月君が太田君を札幌駅迄出迎えに行ったらしい。

一月五日、月曜、晴・曇 午後五時頃、山根君がスキーよりお帰り。午後八時頃帰省中の渡辺君が帰舎された。東京では戦勝気分で大した人出がしてゐたさうだ。

一月六日、火曜、晴 シンガポール大空襲

一月七日、水曜、曇 朝、三村、中安、小林、白崎、兼平君等帰舎。小林、望月、中安の三君早速荒井山あらしに出かける。小生遅ればせ乍ら宮部先生へ御挨拶に上る。

一月八日、木曜、猛吹雪。陸軍始め観兵式とやらで、北一条で分列式が挙行され、予科の代表者達がそこに行く。大東亜戦争の御詔勅の喚発せられてより一ヶ月、中央講堂に於て、学生に対して式が行はれる。だが、授業は消えなかった。

舎生の中、昨夜後く竹沢君帰る。今朝、八時三十分直前に、岡本君現はれ、あとに残るは三宅、菅沼、斉藤の三君丈となる。時局もわきまへず、家にうろうろして、ハイム・ベ一に雇つてゐる連中でもあらうか。早く帰舎される様にお願ひしたい。工学部の人達は忙し相一蜂が蜜を花からすふ様に、本から蜜をすふ様である。蜂は蜜の味を知つてゐるであらうか…。(望月)

一月九日、金 今朝も又、雪が澤山積つている。今日は相当寒い。東京から帰つて来た二、三日は札幌の寒さと殺風景さが身にしみたが、今はかへって冬の札幌の単調さときびしさが心をひきしめて、はりきつて仕事をするには都合がよい。大東亜戦争も増々有利に展開して行く。日本が飛躍し膨張して行く門途／ママ／の年として昭和十七年は誠に目出度い年だ。将来の建設の任務は我々青年にかかつてゐることを思ふと實に愉快だ。ありがたき世に生れたるものかなと思ひつゝ勇戦奮闘しつゝある第一戦／ママ／の将兵のことに

思ひを馳せる。誰かが「この世紀の大戦争に一員として参加することの光栄に胸うちふるへる」と実戦記に書いてあったが、これは同時に全将兵の心であらうと思ふ。八紘一宇の大精神を全東亜に押し及ぼす大理想実現のための戦おごりたかぶれる英米人に日本の力を知らしめてやる好期（機?）。道義をどこまでも貫かせるための正義の軍。これ程愉快的な楽しいくさはない。全戦全勝もむべなかるかな。正義の強さをしみ〇と痛感する。 渡辺

一月十日、 雪 今日ノ雪ハ実ニ美シカッタ。殊ニ昼ゴロノハ六華ノ結晶ガハッキリ見エ、シカモドレヲトッテモ皆ソウナノデ驚イタ。空ニハワ（口以下五字、意味不明）霞雲ガカカリ、煤煙トマザッテ北国特有ノ鉛色ヲ現出シテキル。東京アタリト比ベテズット明ルイ。大通リフキンノ雪景色ハ実ニイイ。向ウガワノ四角バツタ建物ノ上ニ厚イ雪ノ層ヲイタダイテキル所ハ全ク札幌的デアル。右ヲミレバ三角山他ノ山ガ美シイ。

夕飯前ニ舎ノワキノ雪ヨケヲヤッタ。ナカナカノアルバイト。シカモ夜ハヤハリヤリニクイト思ウ。 竹沢

一月十一日 晴（日曜日） 渡辺、望月、三村、中安、岡本諸兄、春香山ヘスキーに出かけた。（白崎）

一月十二日 月曜日 夜コンパあり、汁粉及びパンを食ふ。大変うまかった（岡本）

一月十三日 皇軍、蘭領ボルネホに上陸。「櫓の音」のメ切期日迫るも、書いてゐる者は余り無いらしい。舎は平穩。斎藤

一月十四日 水曜 本日ニュースで"我が潜水艦は米航空母艦レキシントン型三万三千トンを撃沈せり"と。潜水艦の功績偉大なり。

スキーの手稲登山は春香山に変更さる。中安

一月十五日 天気ハ割合に良かったが、ひるすぎから、急に冷えて、雪が降り始めた。気温が低かったせいか、雪の一片々々がきれいな結晶をして舞い降りて来た。

今日、大学新聞が配られた。いづれも大東亜戦争に緊張した記事ばかりであつた。其の記事の一つに「今や西洋中心の時代。即 東洋が西洋の支配下にあつて其の発展を挨つて来た時代から、独立不羈なる東洋中心の時代に移らうとしてゐる。そしてこの大東亜戦争が丁度其の轉換の時である」と言つてゐたが、ほんとうにそうだと思ふ。然し、我々ハ誤解してはいけない。

なる程、従來の東洋は、西洋の蹂躪にまかせ、そして東洋的なるものを全く没却しかけて来た。何から何まで西洋中心主義でうづもれ、そして西洋の文明は全東洋を風靡した。此処に到つて、我々ハこの戦争を機会として、西洋中心から離れ、東洋中心へと努力しつゝある。然し乍ら、それかと言つて、何でもかでも西洋的なものを排斥しようとするのは、愚な事であらう。

今日、西洋から東洋へと言はれてゐるのハ、あらゆる西洋的なものを廢めてしまへと言ふのではなくて、唯、西洋的な精神から脱却して日本的な精神を根本とし、其の上で事に当らねばならぬと言ふ事だと思ふ。

だから、「西欧的な教養」を身につけても「学問、思想、又ハ生活に於て、西欧的なものに傾倒」してゐても、其の持する精神が、日本的な自覺にあればよいのであつて何等、其れ等に対して躊躇することはないと思ふ。三村

一月十六日、金曜、晴 午前七時半零下十六・五度、午後六時零下一〇・五度。別に變

った事もない。一日中良い天気だった。

一月十七日 土 明日ノ春香山スキーを向へて全舎生ハリキル。

一月十八日 日 晴天 今日舎の冬期春香山登山を行ふ。快晴、どこまでも澄みきった青空。それに二、三つのちぎれ雲。森厳さをもつタンネの林。どこまでもつづくシュプール。色とりどりのスキーヤーの服装。えにいはいはれぬ美しさをもつ海の色。それをとりまく山々の日に輝く様は之正に一幅の絵画である。更に登りヒュッテに達す。タンネの森から出ると忽然として山頂が望まれる。ヒュッテ前にて昼食をとり勇躍頂上に向かふ。午後一時頂上を極む。約四十分ゲレンデで遊び、下山を初む。非常に複雑な地形のため小生転ぶこと数十遍。全身雪達磨となる。

四時二十八分の列車にて帰札す。途中一人の落伍者も事故者もなく登山を終へた事は舎の為めに嬉しい事である。総員十名。(小林)

一月十九日 晴後曇 午後になって雪降り始める、寒さ酷し。寒さの酷しい日が続く。殊に今日の寒さは格別だった。さすが寒国育ちの小生も驚いた様な寒さ。気温は恐らく零下二十度と一寸下つた事だらう。今迄札幌生活三年目、今年で四年目の冬を迎へたが、札幌では冬が一番寒い時でも零下十五度位と相場が定まっていたが、今年は大寒入りを前にしてこんな寒い日が続くから、せいゝ用心して風邪を引かぬ様気をつけねばならぬ。

あまり寒い故か、雪が割合降らぬ。先週は月曜の午後から一寸吹雪いたきり昨日迄雪降りはなかった。が、今日の午後降り始めた雪は、夜に到るもやまず。夜中久し振りにラッセルの音が電車通りにきかれた。

本日教練(農医学部一年目) 新任重松大佐の挨拶あり。素晴らしく体格の良い人。童顔をほころばせて語る話振りは豪放な武人を思はせる。劈頭、誠心誠意事に当れ、実行家たる事と力強く学生に呼びかけた。[一字判読困難]に陳腐な言の様であるが適切に得て我々学生[一字判読困難] インテリゲンチャーを以て自任してゐる人々の欠点を見ぬいた言葉といはねばならぬ。知識を身につけて真に謙虚な、たくましき精神の持主たらねばならぬ筈の者。我々学生が兎角多言を弄して欺瞞的行をしたり、いたづらに批判的にながれ、反面全く実行力無き無力者となり勝ちな事を自分の身に徹して痛感させられた次第だ。我々学生の心して味ふべき至言なりと痛感した次第なり。三宅記

一月二十日(火曜日) 相変らず寒い。内地の寒さとは一寸桁が違ふ。僕は手袋を使はなかったら手が荒れて困った。舎内平穩。

マレー皇軍、進撃物凄く、星港の陥落も間近。櫻花(サクラ)の国に生れたるもの、幸(サチ)をしみじみと感ず。(兼平)

一月二十一日 安芸海全勝してゐる。舎内平穩なり。(望月)

一月二十二日(木) 今日珍しく暖かい。明日から僕等は試験。毎日勉強に遂はれてゐると生活は至極平凡となる。(渡辺)

一月二十三日(金) 予科ハ予餞会デ休ミ。工学部ハ試験デオ忙シイ。夜、河辺君帰舎サレる。割合、元気デアル。「櫓ノ音」メキッタ筈ナノニマダ出サヌ人二、三アル。今日ハ比較的暖カデアッタ。竹沢

一月二十四日(土) 土曜日といふのに到って平穩。午後は斎藤さん、小林さんと将棋する。冬休以降、斎藤さんはうまくなった。晩街へ出る。

一月二十五日(日) ●〔雨冠に非〕々として降りかかる雪をついて春香山へ登る。吾、山根、斎藤、小林諸兄なり。別に三宅、菅沼、三村諸兄、ネオパク〔?〕を滑る。春香絶頂の雪質、極めて良。数々の珍事をつくって降りる。頂上より下まで約一時間。三時八分の汽車で帰る。(白崎)

一月二十六日 一年生、軍事〔?〕教練あり。満足に滑べれないのに銃を持たされるなんて無茶な話し。荒井山あたりでソウゾウ戦をして別れる。つかれた。寄宿舎では、朝起きてアワテ、飯を食ったり、食なかつたりして、〔五字判読困難〕。帰て来て、ストーブつけて、めしを食つて、ダベって、寝る。と云ふような平和な毎日が続いてゐる。岡本

一月二十七日(火) 夜、小林、白崎君と日活へ「次郎物語」を見に行く。自然にのびる子供とそれを夫々の立場で育て教育する母、父、祖母、乳母が画かれる。結局ひねくれるであらう所を父の理解ですくすくと力強くのびてゆく。その蔭の乳母の愛、厳格にすぎたが尊い母性愛、少年の純真さによって遺憾なき近來の名画である。尚、同時に何とかブラザーズといふ四人のいゝ年輩の男のアトラクションがあつたが、特に時代が時代だけに感じが悪かつた。やる事と言ふ事は徹頭徹尾決戦体制的であるが、あの落着きのないジャズの気分は根本において西欧の頹廢的気分の表徴である。少くとも民族意識に目ざめた現代日本人とは相容れぬ種類のものである。やがてすたれ行く運命の前にわづか一本のよるべをたよってあへぐ彼等の姿はむしろ哀れであつた。斎藤

一月二十八日 水曜日 舎内は平穩、何事も無し。愈々豫科の試験も近づいたといふのに少しも落着かず勉強は全然手がつかない。それで夜、心を落付かせるには一思ひに遊ぶべしと思つて兼平と豪勢な第一次?スタコンをやつた。仲々愉快だつた。中安

一月二十九日 朝、天気がよいので、目が覺めた。体の調子が悪いので一日中ゴロゴロ寝てみたので、舎の様子もわからなかつた。ねてみると、何だか世間から遠ざかつてしまつた様な気がしてならない。今日もシーンと静まつた舎の中で、いろいろな事を空想しながらねてみたら、どこかで子供達がジャンケンをしてゐる楽しさうな声がきこえて來た。いつもなら、うるさく思ふのに今日ハ何となく、懐かしく、どこか遠い所でちがつた世界で遊んでゐる様に思はれた。「櫓の音」の中の”小さな世界”を思ひ出した。病氣のときにいつもきまつて、家が恋ひしくなつて來る。三村

一月三十日 金曜 晴 午前七時半、室内4℃、室外-18℃、午後六時、室内20℃、室外-9℃ 終日良いお天気だつた。いつもの如く登校した。昼休みに和生菓子を買ひに行つたが、時既に遅く、売り切れた後だつた。仕方がないので、大福餅を例の店へ買ひに行つたが、之また本日休業との事で買へなかつた。運の悪いときにはどうにも仕様がなない。本日夕食の「卯の花の油いため」のお菜は甚だ美味であつた。お蔭様で、夕食をおいしく食べることが出来、感謝に堪へない。

学校の図書室で雑誌を読んで居ると、昼過ぎの暖かい日光が照らしてくれ、雑音一つ聞えない中に雀のチュッチュッと轉るのが耳にはいつて來て實に長閑な天気であつた。我が故郷の天気も、かくやありなんと、そぞろ望郷の念に驅られる。

一月三十一日 土 予科三年生野外教練

二月一日 日 晴 円山、三角にスキーに行く者二、三名あり。良心的なる舎生は屋根の雪を落せり。本日より防空演習が始まるが、町には小〔?〕の代りに雪の固まりがつんである。もう二月になった。早く学校の終るのを待つ心盛なり。 河辺

二月二日 (月) 曇後雨 近頃街を歩いて居ると、盛んに決戦体制下らしい標語が目につく。一目見て直ぐぴんと来るのは、矢張り国民が自覚して居るためか。

今日白崎君帰省す。ゆっくり静養して来て貰ひたい。そして丈夫になって帰って来て又共に生活しよう。今日から衣類が切符制となつて、舎生にも切符が配布された。一年間に百点はやゝ少い様だ。ことに卒業近い僕等にとっては。しかしこれも時局の然らしめる所だから、我慢すべきだろう。 (小林)

二月三日 (火) 曇 舎内に特記する事なし。二、三日暖い日が続く”春来”と思はせたが今日は又寒さ戻つた。がしかし段々春めいて来る事だらう。冬来りなば春遠からじか、日もずんずん長く五時と雖もまだ明るい。夜遅く、学校からの帰途、人生に於て自分の与へられた仕事に忠実な人こそ本当にすぐれた人であらう、ふとこんな事を思いつつ帰舎す。冷えたちらしが食物入れの棚にぼつんと二つ、主人の帰りを待ちわびてみた。 三宅

二月四日 (水) 舎内平穩。忍び寄る春のけはひが感ぜられる。 (兼平生)

二月五日 (木) 舎内平穩。健さん、試験終つて春香山へ張切つて行く。〔雪?〕少けれども寒さ激し。〔一字不明〕ヶ月振りでのこの日誌に記す、感無量一 (太田生)

二月六日 金 本学開学記念日。夜、月次会。出席者は●田、山口両兄生のみ。

二月十五日 皇軍、シンガポール占領。

二月十六日 第十四公区防空演習始まる。第一次祝賀記念式は十八日に実施と内閣にて決定。予科ボーイは二十三日から試験が始まるので準備に忙殺されてゐる。夜、灯火管制あり。

二月十七日 (火) 小林君、実習より帰る。黑板には食事部公表として、シンガポール陥落祝晚餐会の予定が発表されてゐる。

二月十八日 シンガポール陥落の祝賀のため、小学校から大学まで授業はなし。北大も此の日、九時より、今総長のお話しと、万才三唱の後、一路護国神社に行進、皇軍将士に感謝の誠を示す。我が落下傘部隊はスマトラ島の要衝パレンマをおとし入れたとの事である。シンガポール島は昭南島と命名される。

予科生、試験を間近にひかへて、緊揮一番といふ恰好である。 (望月)

二月十九日 北国の冬は淋しい。夜十時過、雪の中にねむる街の中を歩いてかへる時そのおそろしい程のしづけさを苦しい程感じた。僕等の製図はもうあと一息といふところだ。年限短縮で製図の負担も重い。予科は試験日前、大いに頑張つてくれ。 渡辺

二月二十日 (金) 晴時々雪 寒し

△白崎がオイシイオ菓子ヲ送ツテクレる。故郷ニ帰りナガラ我々ノ事ヲ考ヘテクレル彼ノ親切サニ感泣する。皆ニ分ケテタバタ。実ニ美味イ。シンガポールノ陥落ニ感激スルト同時ニ友ノ親切ニ感激デキル人間デアリタイ。

△パラシュート部隊ノニュース映画ヲ見る。実ニ命懸ノ藝術デアル。戦争ノ様相ノ中ニモ美シサハアル。シカシソレハアク迄藝術ノタメノモノデハナイ。

○今日ハ決算ガアッタ。予科試験ノタメ本科ノ人々デ行く。御苦勞ヲ謝ス。舎費ハ二十五

円八十五銭〔以下四字意味不明〕。昼ヌキデハアマリアイ方デハナイ。モ少シヨイモノヲ  
タバテ安ク上リサウナ気ガスル。ソレニハ〔二字判読困難〕ヲ何トカシナケレバナラナイ。  
トニカク現在ノ寄宿舎ハ大改造ヲ要スル時期に到来シテイルコトハ確カデアル。目的論的、  
観念論的考ヘカラ脱シナイカギリソレハ不可能デハアラウケド。 竹沢

日記ニ署名シナイ人ガ時々アリマスガ、ナルタケ書イテ下サイ。ソレカラ日記ヲ一室ニ  
遅滞サセナイヨウニ 文塾部

二月二十一日(土) 予科一年の授業も終りとなった。いよいよ明後日より試験である。  
今日から一週間、一日で忘れてしまふことも憶えなくてはならぬのかと思ふと寝たくなる。

岡本

二月二十二日(日) 暖かし 昨日で予科の授業はすべて終り、明日から最後の試験が  
始まる。皆猛勉強してゐるらしく舎は静かだ。かへりみると予科の授業は一口で言へば一般  
につまらなかつた。それは教師の「考え方」による事が大きな影響をしてゐる。我々は本  
当に尊敬すべき先生と、そうでない先生との区別がよくつく様になつた。その先生の前で  
は心から礼をせずにはゐられないのである。人に自分に対して形式的な礼を強制する前に、  
先づ自ら礼をされる様な人になるべきである。

この三年間の時代の変遷は実にめまぐるしく、特筆大書すべき三年間であつた。やる内  
容は同じであつてもやはり、一高や三高の学生は大学へ行ってからの勉強ぶりや怠りぶりが  
断然他とちがふそうである。

我々は学校のそのものの外にもっと大きな精神と言はうか、態度と言はうか、気風と言  
はうか、そういう根強いものを特に予科時代につかまなければならぬ。そこに高校生活  
を送つた者の価値がある。特に物事を公平に正しくみて理解し、正しい理論にもとづいた  
強い実行力を養ふ事が一番大事だと近頃感じてゐる。 (斎藤)

二月二十三日(月曜) 愈々今日から試験が始まつた。三学期の試験は毎年そうである  
そうだが一寸も皆張り切つて居なかつた様に思はれた。一番最初は数学であつたらうが果  
して皆、良い成績が取れたであらうか?

今日午後消防自動車の走るサイレンの音を聞いた。何処か火事だつたのだらう。而して  
又午前二時過に静寂とした闇の中に再びサイレンの音を聞いた。窓から見ると鉄北ぜんざ  
いの方向だつた。が兎に角此頃は実に火事が多い。此こそ本当に国家的立場から云つてつ  
まらぬ損害だ。だから皆もせいぜい火の用心をしなければならぬと思ふ。 (中安)

二月二十四日 晴 暖し 試験第二日、すべり出しが悪くて、コンデ〔条件付き及第の  
意一編集委〕の前兆がある。

舎の日記について。舎の日記に、唯、舎に関係した記事のみをづらづらと書き述べるだ  
けでハ凡そ無意味である。それなら何も各部屋に無理をして廻す必要もない。人によつて  
ハ、或ひハ其の日の舎に関する事件に気がつかない人もあらうし、あまりそれらに関  
心をもたない人もあらう。だから、記事などハ自然粗雑になつて正確さを欠く〔?二字判読  
困難〕様になるかも知れない。

それよりも、副舎長なり、文塾部なりで、責任をもつて其の日の記事を書いて行つた方  
が殆かに、すべての点で経済的だと思ふ。

それならなぜ、各部屋に廻すのであらう。一人で書くのが面倒だからだらうか。或ひハ

単に書くことによって、舎に関係づけるためだからだろうか。私ハそうハ思ハない。人によって見方もあるだらうけれど、私ハこれにハもっと重大な意義があると思ふ。一体個人の日記にしてもそうだが、単に過去の記事をとどめると言ふ事だけならば、日記としての価値を半減したものと云つてよい。勿論記事をとどめると云ふ、其の事ハ、大切な事に違ひはないが、日記にハもっと、大きな半面がある。それハ、個人の魂の生長過程の記録であり、この記録を書くことによって吾人ハ反省し、この記録を読むことによって、過去の自分と現在の自分を比較し批判し、此処で始めて人間の心が生長して行くと言ふ。この事である。

これハ舎の日記に於てもそうだと思ふ。舎はどこ迄も個人の集合である。従つて舎の持つ精神ハ、どこ迄も個人の精神に負ふて居り、個人の精神に立脚して始めて成立するのだから、舎の精神ハ、其の時代々々に於ける個人の精神のあらはれであり、四拾数年の昔、うち立てられた舎の精神ハ、其の時々の青年の精神によって附加させられ乍ら、現在に到つてゐる。

かう考えると在舎生の個人のもつ精神の意義ハ頗る重大と云ハねバならない。かう言つた意味で舎の日記ハ実に重大なる使命を有してゐる。それハ、我が舎の舎精神の過去の記録であるばかりでなく、これから進歩して行く舎精神の一ツの尊い階段の役目をする。

然るが故に日記を各部屋に廻すと云ふ事ハ、非常に意義がある。各人が、この日記に思ひ思ひの感想、単に舎に関係したことだけでなく、現代の世代のあらゆる方面に渡つての考へを書き、お互ひに批判し検討することによって、個人の精神も進展し、其の中にうちもられて行く舎精神も常に向上の道をたどるだらう。

かくすることによって、現在の舎の沈滞とか言ふ問題も一蹴されハしないだらうかー。五十年史も是非完成させたい気持ちハもつてゐる。 「三村」

二月二十五日 水曜 晴後曇 防空演習で窓に遮光紙を張つておくと、朝寝をし勝ちである。登校の途中、雪が融けて青い草が現れてゐたり、天氣の良い日に、空に浮んでゐる雲を見たりすると、春の近づいてゐるのを感じさせられる。 秋葉

二月二十六日 木曜 晴後曇 防空演習終り、予科ノ試験モ下リ坂ダ。 菅沼

二月二十七日 (金) 晴 下ラヌ届理屈ヲ考ヘタクナイトキニハ簡單ナ日記ヲ書イテ気持ヲ表ハス。

簡單ナモノカラ大キナモノヲ抽出スコトヲ知ラナイ者ハ沈滞トカ何トカヨク使ハレル言葉ヲ録ニ考ヘモシナイデ使用シガチデアル。沈滞ハ飛躍ヲヨリ力強クスル温床デアル。予科ヲモウスグ終了セントシテルガ三年間ヲ顧ミルト色々ナコトヲ考ヘル。

三年間デ、札幌ハ離レラレナイ位好キナ町トナツタ。決シテ無駄デナイ三年間ダツタ。呑氣ニサボツテタコトガ自分ニハ或ル力強サヲ与ヘテクレタ。モットサボレバヨクッタト思ツテル。後悔スルコトハ運動ヲ一年ノトキカラヤレバヨクッタコト、自分ヲ確立出来ズ人ニ引ズラレ勝ダツタコト、等、結局予科、高校ハアツテモナクテモイ存在デアル。

二、三日前カラ雪ガトケテ部屋ノ中ニ落ち困ツテル部屋ガアツタガ雪落シノ結果元通りニ生活出来ルヤウニナツタ。春ニナツテ雨ガ降ル時ハ何ウナルカ、些カ氣ニナル。

ニューギニア沖デ敵航空母艦沈ス、体当リシタ勇士ノ心ヲ思フ。 河辺

二月二十八日 (土) 晴 今日で予科の試験も終りホッと一息の程、本当にご苦労様。終

了離別の意味で午後五時より「蝦天」でコンパを行ふ。周囲の者が皆帰るのと思ふと腐るが、これも国の為と思へば何でもない。

三村君の説には不賛成だ。舎の日誌である以上舎の内外に関する事についての事項のみを書くべきである。しかし文芸部が各人の感想又は時代に対する考を書かせたい意趣なら、そのような意趣を特に皆に伝えて書かせるがよい。しかしこれは強制さるべき問題では無い。何故なれば感想を書くといふ事は多分にその時の気分によるからだ。(小林)

三月一日(日) 一昨日、昨日と暖い日が続いたが、殊に本日は暖く、街をぷらぷらと歩いてみると、背中に射す日光の暖さにぼかぼか身体が温まって来る。全く春が近いといふ気がする。道路の雪も大分とけ、電車道の舗装が露はれ出した。日中はストーブのいらぬ程の暖かさだった。

舎内の動き甚し。予科生、学期試験を終え、今朝から帰省相継ぐ。三村、兼平、朝の列車にて、夜、三々伍々、岡本、中安、望月、河辺、斉藤帰る。

其の他、二十七日兼平の後輩、虻川、予科農類受験の為め来札、九号室に居を構へ戦闘準備怠りない。又太田君の後輩、三本木、農業の中村、又虻川と〔二字判読困難〕の中村(何れも農科志望)の二君、計五君〔?計算合わず〕が吾々と起居を共にしてる。何れも紅顔の美少年、目捷に控へた試験に胸を躍らせてる事だらう。

東北健児許り、ズーザー弁やら津軽弁やらでズーラ、ズーラやってしゃべってる。些か寂しくなかけた舎も随分賑やかだ。彼等の成功を祈るや切なり。又彼等の為め親心から特に昼めしを出してやるとの事、結構なり。

三月二日(月) 残留する舎生八名、外に受験生三名、計十一名。春の如き昨日とは全く反対に、本日午前中より吹雪始め午後に至る迄続いた。恰も冬の名残りを借しむかの様に、久し振りに白魔の跳梁が見られた。昨日帰省した舎生が連絡船当たりで荒れられてるのではないかと気にもなる。夕飯後受験生と漫談、彼等仲々朗かなり。新しき賄俵補の来舎しきりなり。 三宅記

三月五日 夜受験生帰る。受験生持参の白米にてスシを食ふ。バタバヤ完全攻略。

三月六日 曇、暖し 夜二度も酔払ひ舞込む。菅沼君に名刺を取り上げられた上ドヤサレテ帰る。賄人後任やっとなり決定し一安堵する。御世話下さった奥田先生に対して深甚なる感謝を捧ぐ。

三月七日 吹雪 全く不順な天候である。三村君より慰問文を受ける。朝刊にて、ホノルル攻撃に参加、雄々しくも散華した、特別攻撃隊員岩佐大尉以下八名の偉業を知った。

三月八日 快晴 第三国大詔奉戴日。昨日の吹雪で粉雪三寸位積る。ケンサン、ヤブーウは、春香山に浮れあるく。他の学部生は試験勉強に余念なし。午後田村先輩来舎さる。朝日もタイムスもその三面はハワイ攻撃特殊潜航艇に関する記事で埋れてゐる。(山根)

三月九日 曇 昨八日午前ビルマのラングーン完全占領さると報あり。竹沢君夜行にて帰省す。

三月十日 曇 暖し 陸軍記念日。蘭印全軍無条件降服す。

三月十二日(晴) 大東亜戦争第二次祝賀会。賄後任小松由郎氏夫人、本日より見習と



して来る。ニューギネヤ敵前上陸に成功。

三月十三日 曇 夜森被服工場にて公区長改選あり。秋葉、山根出席す。林檎配給を申告す。岡本君より御葉書頂く。公区長は三田作蔵氏に再選。

三月二十日〔十四日の誤り?〕夜決算する。

三月十五日 賄交代す。

三月十六日(月曜) 午前中に小雪がちらついて来たが、後晴天となった。今日から愈々パンを食えへなくなった。予科、実科、専門部の入学試験合格者の名前が発表された。

三月十七日(火曜) 曇 賄の人が交代してから朝・夕食とも早くなった。近々の中に農学部の試験が始まる。

三月十八日(水曜) 曇、一時小雪 此の数日来、四時間目の講義を終わって後中央食堂へ行くと、もはや売切となって昼食を摂れない。

三月十九日(木曜) 晴 講義を終わって後、味噌と醤油の配給を受けに行って来た。味噌が重くて一人で担へなかつたので、近所に居た国民学校の児童を頼んで、助けてもらった。天気が良く雪が融け路上を歩きにくい。

三月二十日(金曜) 薄曇 夜、決算を行った。今月は、比較的舎費が安かった。

三月二十一日(土曜) 薄曇 今日には春季皇霊祭の取行はせられる日だ。「暑さ寒さも彼岸まで」と言われて居るやうに、次第に暖かくなることだらう。街路には人波が打っている。

三月二十二日(日曜) 曇 夜、岡本君が帰舎された。予科は明日から授業が始まるらしい。

三月二十三日(月曜) 快晴 終日実によい天気で、全く春になった。朝八時頃、三村、中安両君帰舎。夜十時頃、兼平君帰舎。

三月二十四日(火曜) 小雨 登校するのは予科生だけで、残余の舎生は試験準備や休暇で大体登校しない。夜四月よりの新しい室割を、六号室にて、抽選にて定めた。

三月二十五日(水曜) 晴後小雨 三宅君が夜十一時の列車で帰省された。

三月二十六日(木曜) 雪後曇 次第に春が近づきつつある時、雪が降り始め、冬へ逆戻りしたやうな感じがする。皇軍は遂に印度洋へ進出し、守備せる英軍を無条件降服させてしまった。

三月二十七日(金曜) 雪 今日にも雪降り、樹々の梢に白い花が咲いた。農学部の入学試験の中、筆答試験は昨日、今日で終了し、太田君、予想外に成績が良いらしく御満悦の程一人深し。今将に臥薪嘗胆の労働ひられんとす、同君の喜び察するに余りあり。

三月二十八日(土曜) 雪後曇 雪も漸くのことで止み、時々、太陽が見え始めた。二十六日以来不通になって居た函館本線は復旧工事成り、開通した。関門海底トンネルも開通し、軌条を敷設する段取となった。竹澤新角お帰り。

三月二十九日(日曜) 曇 飯島寿君(工学部土木科一年生)内田清君(林学実科一年)入舎さる。夜、望月、斉藤両新角お帰り。

三月三十日(月曜) 曇 きさらぎの夢、醒めやらぬ未明、某、某、某予科生、遂に新角歓迎のストームを始め、ストームの歌を高唱しつつ、廊下を往復すること三回、大いに気焰をあげたらしい。夜、大泉敬三郎君(予科理類一年)入舎さる。

三月三十一日(火曜) 晴 竹澤浩三郎新角、名残りを惜しみつつ引越をせり。槇田一郎

(理類一年) 土居通明 (工類一年) 岡村俊二 (農類一年) の三君入舎さる。中村卓三君は、待てど暮らせど出かけて来ない。夕食前、簡単に各自が自己紹介をなし、其の後一緒に食事を摂った。三月も今日で終りだ。明日から、封書が五銭、其の他、小包郵便料金等、それからもう一つ乗車賃が値上げされる。

四月一日 (水曜) 晴 学部、予科、実科、専門部の入学式が挙行された。今日は実に良いお天気だった。噂をすれば影がさすとか、昨夜遅く中村卓三君 (農学実科一年) 入舎さる。朝七時の列車にて、山根君、馬術の試合にて名古屋へ向って出発。渡辺君も一緒に帰省された。望月君は、どこかへ旅行にお出かけ。午後、岩瀬衛司君 (医類一年) 入舎さる。夜七時の列車にて、太田隆三新角御帰省、三本木の女学生さん達も喜ぶだらう。室の引越して、皆忙しさうだ。

四月二日 (木曜) 晴 今日良い天気で、雪が次第に姿を消してゆく。夜、食堂からピンポンの音が陽気に聞えてくる。

四月三日 (金曜) 晴後曇 神武天皇祭。配給のお菓子を皆で分配して食った。夜七時半頃、白崎君が久し振りで帰舎された。相変わらず元気さうだ。朝の三時頃、予科二、三年生、実科の某君それに新角某君達、新入舎生の歓迎大ストームを敢行せり、寄宿舍の廊下が幾分沈下したことだらう。某新入生は「起きろ」といふ大音声に応じて、真面目にも服装を整へて室から出て来た。

四月四日 (土曜) 曇 薄ら寒い日だった。別に変わった事もない。夕方、実科の某生徒、誰かの新しい角帽を借用して何処かへ出かけたなら、寄宿舍の窓から「新角!!」といふ声の一斉射撃を浴びて、一寸恥しさうに駆出して見えなくなった。

四月五日 (日曜) 雨時々雪 今日又雪が降り出して、少し積った。午前中に斎藤弘夫新角退舎さる。夜十時頃、望月君、旅行先から御帰り。夜、食堂からピンポンの音が聞えて来る。近所の室で、新丸達、ストームの歌を練習してゐる。さては、近々の中に返礼ストームをやるかな。夜十一時頃、渡辺君、太田君お帰り。東京の方は桜が散り始めたさうだ。あゝそれなのに、それなのに、札幌にては雪が降るとは。

四月六日 (月曜) 曇後晴 予科、実科、専門部の入学式が中央講堂で挙行された。

四月七日 (火曜) 晴時々曇 午前一時半頃、遂に新入生達、返礼ストームを始めた。ストームの歌を十分憶え込まないらしく、スキーで廊下を叩く音の方が多く聞える。

四月八日 (水曜) 晴 第四回大詔奉載日で、午後一時から農学部新館前広場で詔書捧読式が挙行された。三宅さん、夜十時頃お帰り。

四月九日 (木曜) 曇後小雨 新入生歓迎会のために、委員各位が活躍して居られるやうである。山根副舎長、夜八時頃お帰り。今日で舎生も大体揃った。

四月十日 (金曜) 曇時々小雨 田村君が退舎された。

四月十一日 (土曜) 晴たり曇たり 先づ食ふ事から書初めよう。昨日から、中央食堂の開戸時刻が零時四十分となり、学生生徒は長蛇の列を作って、三十分程待って後漸く一皿の飯にありつける。中央講堂で、三時半より映画会が開催され、文化映画「燃ゆる大空」が上映された。現今の時代には相応しいものであらう。五時半より、新入舎生の歓迎晩餐会が催された。七時半より、宮部先生、奥田先生、山口先生の御来舎を得て、新入舎生歓

迎会が開催され、委員の熱心なる活躍により、おいしいお菓子の饗応があり、新入舎生の簡単なる挨拶の後、宮部先生を始め、奥田、山口三先生の鄭重、御懇篤なる祝辞、御訓辞を頂き、又、例の如く、山口先生の面白味溢れたる御話を承り、歓談裡に九時頃閉会した。引続、各部の部員の詮衡があり、次の如く部員を決定した。

食事部一太田、中安、岡本、兼平、大泉、榎田、中村の諸君。

運動部一望月、飯島、白崎、土居、北野、内田の諸君。

文芸部一渡辺、三宅、秋葉、小林、岩瀬の諸君。

会計部一三村君。

庶務 一菅沼君。

うれしびあれば悲しみありとか、土居君、風邪を引かれて、高熱を発して居るやうだ。海山遠く隔てて、異郷に病む者の心中や如何。速かに快癒されんことを。本日迄長いこと、日記も一室に停滞した。さぞかし御退屈の事だらう。そろりそろり、他の室も拝見に廻らせて、青春の気漲る新入舎生の心に映ぜる印象を、この日記の一行一行に映し出して頂くこととしよう。いでや早速いでたつこととしよう。

午後十一時、土井〔土居の誤りか〕君折津病院へ入院す。

四月十二日（日） 午前零時過ぎ突如として夜のしじまを破る蛮声、これぞ新入生歓迎大ストームである。昨夜土居君の看護のため病院に泊まった岡本、兼平両君が朝食をとりて帰って来る。土居君の熱も下り、快調の由一安堵する。昼の汽車で同君の父君及び姉妹来札される。太田、望月、中安、大泉君等藻岩ヘゾンメルシー。明日より愈々弁当持参と決まり、太田君等弁当箱の割当に忙し。

四月十三日（月） 月曜は日曜の次に来る。嫌な日である。一時間目及び五時間目、六時間目のねむさ亦猛烈なものである。本日より弁当持参。幾月目かに持って行く弁当には、快ひ気持良さがある。土居君を見舞がてらに訪ねたら、桃の缶詰を御馳走になり、御見舞の言葉もあらばこそ、早速頂く。土居君の容態は、よくなっている。早く退院の日を待つ。

（M・望月） 北野君本日入舎す。

四月十四日（火） 四月も半ばと云ふのに朝起きてみると雪が積ってゐる。春らしくするのはいつの日か。近頃将ギが復活して流行してゐる。〔渡辺？二字不鮮明〕

四月十五日（水） 晴、曇、寒 四月の札幌はまだ寒い。寒き風 なに凧（オロシ）かは知らねども 石狩平野を 吹き過ぐる風 …

英印会談、遂にお流れか。クリップスどの顔を提げて本国に帰へるのか。然し老獺なるイギリス、如何なる手を打って来るか油断大敵、油断大敵。（中村）

四月十六日（木） 山根さん、秋葉さん、小林さん、第一乙種に判定す。昨夜林檎の配給あった。夜大挙して街に出るものあり。 白崎

四月十七日（金） 寒いのにストーブのないのはユウウツである。

四月十八日（土） 今日初めて、日本本土が空襲された。相当の被害があるものの如し。札幌はのんびりである。外国の出来事のような。明日は丸角野球戦。昼飯が浮くとは有難い。

四月十九日 今日土居君退院す。日曜日の為め朝から丸角対の野球戦。丸帽大勝、昼飯をオゴラして一同大満足。内田君が又熱を出したらしい。どうも病人は付きものゝやうだ。日頃の腹へり大泉君、飯を食はれて大クサリの由。しゃべってゐるのが聞へる。

四月二十日（月曜） 外は猛烈な風が吹いてゐる。それも段々と暖さが加って愈く春近しを思はせる。風吹かば春遠からず…とは札幌に於てのみ用ひ得る言葉であらう。近頃又ピンポンが復活して来た。丸角対抗試合でもって昼飯にありつかふか・明日は予科桜星会大会が行はれる筈で授業なし。予科生二、三はピンポンに、そして他の二、三はCENTERへと霞む。（中安）

四月二十一日（火曜） 晴たり曇たりの天気。昨夜の大風で、所々の垣根が倒れて居る。予科の報国会大会が中央講堂で開催された。夕食後、六時頃から一時間半許り、食堂にて、舎生一同参集し寄宿舎運営に関する各自の意見の開陳を行った。本日は主として、学部学生と予科、実科生徒間の融和について議論された。其の後一同街へ出た。今夜も風が強い。（秋葉）

四月二十二日（火曜） 内田君病篤し。朝、昼、晩、熱三十九度を越ゆ。夜入院することに決し万事を奥田先生にお頼みす。九時過入院。冷き小雨降る暗き晩也。診察の結果、病状未ださだかならず。祈速快癒。（飯島）

四月二十三日（木） 十二時内田君を大学病院中川内科隔離室に訪ふ。発熱以来の元気をそのまゝ維持し、三十九度なるも非常な元気。早く快癒されん事を願ひつゝ三時半に帰る。案外チプスならざる気もする。晩街に出る者多し。（小林）

四月二十四日（金）晴 今日内田君の熱は下らない。それでも前にくらべたらいくらか下ってゐるがやはり心配だ。早くなほってくれ。兼平、岡本両君帰省。うれしそうだ。

四月二十五日（土）晴 今日食料増産の意味から、舎の周りの土地を耕す。午後、飯島、三村、望月、中安、白崎の諸君、それに僕と六人、今年初めてのテニスをする。愉快。内田君の熱未だ一進一退、心配。（小林）

四月二十六日（日）晴 快晴にして絶好の日曜なり。早朝より食糧増産を目ざして努む舎生の打振る鍬の音聞ゆ。午後の陽光をあびてテニスをする者あり。内田君の病名未だ不明なり。早く退院してくれ。（岩瀬）

四月二十七日（月）曇風強し 昨日は快晴なのに今日は曇。風が冷い。春よ々々であるのに、春のぼかぼかした天気が待ちどほしい。舎内一同変りなし。内田君は相不変だ。心配！新学期はとかく気の落着ぬものである。（太田）

四月二十八日（火）晴 札幌にも春が来た。植物園の樹々も緑の芽が燃え出した。やはり札幌にも春が来るのだと一寸喜ばしくなった。寄宿舎へ入ってからもう二週間になる。皆様が親切に御指導して下さいるので、本当に心強く思つてゐます。初めての札幌の春を待つ私達の心は、本当に楽しいものです。五月一日を期して読書に思索に帰る街ない二十の春を有意義に送らうと決してゐます。春！春！北国の春待つ心。

寄宿舎には特には変りたる事なし。仙台寮より野球の試合を申し込まれる。夜は街へ出る者多数。内田君は相不変との事で心配です。舎内一同一日も全快の日の早からんことを祈るや切。（北野）

四月二十九日 今日ハ天長節にふさわしい日本晴。札幌もこれから晴々した気持のよい日が続くだらう。朝六時半に起きて松島屋に菓子を買ひに行く。九時から学部一年目及、予科三年ハ北一条通の分列式に参加した。午後一時半頃から、新潟寮と野球の試合をやり、十四アルファ対十二で勝った。入舎以来初めての勝利だが、危かしい勝方であった。

四月三十日（木）晴 予科一年は勤勞作業を行った。内田君も退院の見込がついて安心

する。四号室に又病人が出る。家へ帰って食溜めした為らしい。明日から学校の食堂が食券に成るとのこと、くさせられる。夜は街に出た人が多かった。（大泉）

五月一日（金）晴 小春日和が続く。殊に本日は汗ばむ程の暖かさであった。北海道の一番良い季節が始まる。楽しい事だ。何の刺激に感応したか、舎の東側に部屋を占むる者共、朝早起が流行してゐる。良い傾向だ。来る五月三日午後一時より米沢寮と野球試合あり。昨夜メンバー発表された。大いに奮闘して勝たう。内田、大事をとってか退院延期。（三宅記）

五月二日（土）晴 毎日ノ晴天デ後ガ恐ロシイ様ダ。内田君退院日未ダ不決。（菅沼生）

五月三日 晴 午後一時より米沢寮と野球試合。吾が軍、七対五にて快勝す。

五月四日 内田君お目出度く退院さる。頬がゲッソリと落ちてしまったが、大食を以ては敵の無い彼のこと故、間も無く昔の豪の者に帰るだらう。翼賛選挙の発表を、ヒッキリ無しにラジオが放送してゐる。

五月六日 曇 薄別旅行も九日と決定した様だ。三村君胃痙攣で床中。北野君大いに読書に思索に有意ギな青春生活を送って下い。（山根）

五月七日（木曜） 舎生活に於ける、或る矛盾を指摘してみやうと思ふ。夜おそく、台所に、行って見ると、流しの上に、一杯、茶碗、急須、亦累々飯盒等が置き散らかしてある。吾々は此の点に注意を向けても良いではなからうか？舎生一同は、おぼさんの労を軽減するために、弁当箱を洗つてゐる。同じ労を軽減するならば、夜のお茶の始末をした方が、弁当箱を洗ふことより、より理想的な状態ではないではなからうか。最も良い方法としては、弁当も、茶飲の茶碗をも、朝晩の定食以外の残骸は、吾々が片付けることであらうが、それが不可能と来たら、夜食の片付け位にしたらどうだらう。勝手に飯を食い乍ら、残骸は人に片付けさせるのは少し、考へものゝ様な気もする。こんなことを言ふと、まるで自分が、ひがみ根性を起してゐる様に見へるだらうが、正当な考え方から推して見ても、こんなことが言へると思ふ。断然言へる。舎生が、勝手に遊び、食い、その片付けを人にさせるのは、勝手に強すぎる様だ。おぼさんを女中同然に考へる傾向を排すとすれば、その位のことは、行つてもよいだらう。

要之に①自分は、舎生に、弁当を洗ふことをやめさせるか、或は②夜食の残骸を片付け、同時に弁当も洗ふ③亦或ひは、夜食、喫茶の後始末をなして、弁当洗ひはやめるか、何れかをとることが、理論的に筋道が通つてゐる様だ。弁当は定食の一つである。

以上、舎生活刷新への、一申告をなす。

春がやって来て、木の芽は出、陽光は暖かに輝き、春風は頬を撫でれば冬の殻を脱ぎ、〔様々？二字判読しずらし〕乙女の群は、北五条の通りを、朝は東に、夕は西にと、紅、青、緑と着飾った姿も颯爽と、歩も軽かに歩いて行く。男の心も一きわ慌し。舎生が近頃張り切って朝早く起きる様になったのも、この春の力が大分興（あづ）かって、力があるらしい。この活生化された心に、落ち着きをもたせ様と、恒例の寄宿舍旅行が行はれ様とする。幽〔還？判読しずらい〕なる薄別温泉で、一晚、静謐なる生活を送るのも、豈に亦、青春時代の一頁を飾るものならずや。此の点、吾等は、この旅行に参加出来ない人々に、慰めの言葉を述べねばならぬ。

札幌の桜は満開だが、空には敵機来襲に備へてか、飛行機がまっつゝ。北海道の沿海地区、東部地区には警戒警報が発令されてゐる。(望月)

五月八日 札幌の上空を盛んに飛行機が演習を行つてゐる。のろい練習機を見なれてみた目には快適さうに飛びまはつてゐる新鋭機は気持がよい。桜もすでに満開を過ぎた形で学校に通ふ途中に我々の目を楽しませてくれる。今年の冬は特に寒さが身にしみたせいか、春の息吹は私の魂に強い清らかな感動を与へずには置かない。自然の美しさを身近に感得し、自然をじつと見つめる余裕を与へてくれる札幌の春は、私にとってこの上もなくうれしいものである。

又々大ニュース入る。珊瑚海戦の大勝、わが同胞の働のいかに勇ましく輝けることよ。渡辺記

五月九日 舎生一同薄別へ行く。珊瑚海戦戦果更に拡大す。ここ数日、風は強いが、快晴続く。十一機編隊の戦闘機が猛演習をする。(白崎)

五月十日 異状なし。圓山の桜は満開である。夜遅くガスを使用するものあり。ガスを多く使ふといふのは、その動機、内容上とやかく言われぬが、しばしば僕をして義憤をおこさせるが如き態度をとるものあり、大いに反省を促す。使つて悪いというのではない。白崎

山荘の夜明けに、皆タオルを肩に橋の上を足駄鳴らして湯に入りに行く。既に先客あり。私も入り共に浸る。その気持よき事格別なり。山の手より寮歌高らかに歌い来るは誰か一。兎に角湯はよし。昨夜の愉快な〔一、二字不明〕遊びを語る。湯につかる事一時間、腹の減り具合もいい加減なり。その時既に九時、充分喰らふ。後は散策にキャッチボールに夫々山の一時を過ごす。又スキーに行くあり。山はよし、日曜は楽し。(中村)

(薄別に駆けぬため残り、アルバイトせし人々に感謝す)

五月十一日 (月) 晴後雨 朝早く四時半起き外に出た。青空は高い。空気は清い。太陽は大きく赤い。実に気持ちよい。

新聞は三日通しての激戦、珊瑚海海戦の大戦果で一ぱいである。考えれば考える程凄い成果である。

朝の晴れて居た空が次第に曇り、つひに午後四時頃からポタポタ降り暫らくして止んだ。黒い雲の去り行く間から、赤く黄色い夕陽がさし、辺の雲照り映え実に綺麗だ。七時、太田さん、北野君、大泉君と宮部先生を訪ふ。中村

五月十二日 (火) 朝非常に良い天気なので早く目がさめた。午後よりは次第に天気が悪くなり夕方より風雨が強くなって来た。花も散り始めた。

五月十三日 (水曜日) 晴後曇 今朝もよい天気である。若芽を出しはじめたエルムやその他の木々の間から暖い日の光が二つの窓から入り込んでくる。初夏の気が一杯である。舎に居ても落ち着かぬことおびたしい。

五月十四日 木曜日 雨後晴 昨日から全学会算〔意味不明〕あつて三日続く休の爲めに土居君は帰省されるし、舎生も又町へ出た者が多い様だ。札幌は雨が降ると馬フンは飛ばぬし、雨後景色も又非常に良い。又暮時に長く影を引いた木々、露を含んだ草等今日は特に感ずる。

五月十五日 (金曜) 今日は全学会第一日目で公会堂に於て講演、映画等有り、続いて晩は音楽会が行はれる。舎生も乾パンを目当に大部分の人が出掛る。乾パン振られてくさ

った人も有る由、御気毒様。午後、巖鷲寮と野球の試合をする予定なるも小雨の為延期す。  
(中安)

五月十六日(土曜)小雨 本日は報国会春季大会の第二日で、射撃大会、競歩がある筈であったが降雨のため、中止した。但し授業は無し。この二、三日来、曇勝ちの天気、薄ら寒い。樹々の梢に若葉が着き始め、新緑の候も間もない事だらう。今日は特別寒いので、室内に炭火を入れるのを許された。何時か蒔いた馬鈴薯はなかなか芽を出さないが、どうしたのだらう。夕食のお菜が大層うまかった。(秋葉)

五月十七日(日)時々細雨 夜、炭火を入れる許可が出る。午後、対寮野球マッチ第一回戦、新潟寮と行ひ、無念の惜敗。夜、土居君帰舎。

五月十八日(月)曇後雨 文武会の休み、日曜と三日休んだので皆気の無い様な顔をして学校へ行く。サボル者多し。牧笛の原稿今晚十二時迄。今晚はその為皆少し忙しい。近頃は雨が降って憂鬱だ。此の頃、樹々の梢の緑になったのに気がつく。自然の摂理は偉大なものだ。(S・K生)

五月十九日(火) 数日来振り続けた雨も、どうやら止んで、少し晴れて来たが、何だかさっぱりしない。 内田

五月二十日(水曜) 天気は上ったが風がまだ相当寒い。植物園でねてると何もかも忘れていゝ気持だ。皆大いに利用せられたい。(兼平)

五月二十一日(木曜日) もっと自分の気持を赤裸々に述べよ。文の上手・下手は何になるか。吾等の叫びは真実の声である。 白崎

五月二十一日(木曜) 午後四時より急に汝羊寮と野球の試合をし惜敗す。(岩瀬)

五月二十二日(金曜日) もう初夏だといふのに何といふ寒さだ。今更乍ら北国だと思ふ。ぽかぽかとして身も心も蕩然とした気持にならせる天気は無い。桜が咲いた、然し風は冷い。花が散った。緑の芽が萌えてゐる。若葉が新緑だ。だが未だ寒い。(涼し過ぎる) そしてもう夏。さっぱりかっつと照りつけぬ夏になるのか。舎生一同健在なり。皆仲良く平穩だ。表面だけであつてもまあ芽出度しと思ふべし。白崎君の言ふ「赤裸々に自分の気持を述べよ」といふことは真実に必要だと思ふ。然し果たして誰が述べんとするのか?どの程度述べんとするのか?皆利口だから、自分の考え(尤も考えといつても何か深いことを思ふのは仲ゝ大変なことだ)の弱さ、乏しさを出さないと思ふ。私自身さうである。自己の弱さ、乏しさを赤裸々に出させるのは如何がでせう。皆自己の進まんとする道へ全力を努め給へ。食ふことや、メツチェンの性の駄弁りの巧い人、こんな話題で満足してゐる人(失敬)(してゐるが如く見ゆる人)大して物を考へずに行へる人、色々な人が居る所が世間の面白味だらう。考へるといふことは難しい苦しいものだと言はれてゐる。私もちつとも考へ得ない。もう少し「考へ」ることの出来る者になりたい。「安易といふこと」と「幸福なること」とは同じことだらうか。寄宿舎で最も温厚だといふことは、何もせず、ぢつとしてゐて黙つてゐることであらうか。風当たりが無いから。今の世も亦こんな人を良しとするであらうか。(暴言多辯、眠りに入る前で)

五月二十三日 今日晴天。目に若葉…の句が浮ぶ。舎生一同変りなし。土曜なる故夜外へ出る者多し。一日中暖かで気持良かった。暁の睡にトロンとしてゐた頃ふと聞いた閑古鳥の声。

いま夢に 閑古鳥を聞けり

閑古鳥を忘れざりしが

かなしくあるかな 一啄木一

の歌を夢の中で思ひ浮べた。

赤裸々な事を望むとの言は、真に尤もと思ふ。赤裸々な生活は必要である。虚偽の生活に堪へられなく思ふときが儘々ある。衝突もよからう。真の互の個性の衝突ならば…。然し又此んな考へも心に浮ぶ。共同生活には妥協が必要である。妥協とは、此処で云ふは、自己の善きを取り悪しきを捨てる意と解する。然し半面又、孤独を守り、自己の生活を作るのも必要だ。孤独なれば愛も分かり自己も反省してみるから一。…吾々は虚偽の生活をしてゐる。吾々の社会に於いては虚偽が自然であり、真理であり得る事がある。さればと云つて吾々がさうあつてよいといふ條はない。より明るいより楽しい寄宿舎生活は果して何れから生れるであらうか？生れ得ないのであらうか？乱筆暴言多謝。三村さんは教練にて、旭川に向ふ。(北野)

五月二十四日 日曜日 晴天、時々ぼつりぼつり雨が降る。暖さを通り越して少々暑い。朝から大部分の部屋が大掃除を初めた。十一時頃薯が出る。午後三時から汝羊寮と野球の試合、15A—3で見事に雪辱。夜は又薯が出る。夜中迄高談高笑して居る部屋があるのは良くない傾向だと思ふ。早寝早起!!練習機は四時から飛んでるぞ!!(大泉)

五月二十五日 月曜日 昨日に続き晴天。朝方遠くかっこうの声が一日の晴天を約束するかの如く響いて来る。舎の原始林にかっこうのやってくるのも遠くはあるまい。植物園の垣根越しに咲いてゐる一アメリカナーといふ花の匂ひが道行く人を恍惚とさせる。石狩の野に夏訪れぬか。舎生のアルバイトに依りガラス掃除が便所迄も行きとどき、見違へる程きれいになった。古き舎なればこそ、いたはらねばならぬ。夜、決算。食費意外に安く、ほっと一安心する者多き様。(三宅記)

五月二十六日 火曜日 十七年度春季大掃除パス。二、三日来の晴天続きで浮れ歩いて出たか、舎生少し(八時現在) 菅沼 白崎君、中村君、合宿ヨリ本日昼帰ル。

五月二十八日 三村君旭川兵営宿泊ヨリ帰ル。

五月三十日 快晴 夕刻舎生一同、舎北方ノ空地整理スル。食事部長ハ此度予〔二年？二字判読困難〕ノ兼平君ニナツタ。今後トモ、他部ニ於テモ部長以下、予科生諸君ガ中心トナツテ、思ヒ通りヤツテ行カレルコトガ必要デアル。

五月三十一日(日曜) 日曜を、学校で過して、夕飯に帰って来たら、相撲の夏場所をやるといふ。おそろおそろ末席に隠れてゐたら、その中に、夕闇が迫って、お流れとなる。予科生諸君は、明日運動会とかで、のんびり〔り？一字脱落〕遊んでゐる。うるさいこと限りなし。だが別に邪魔だとも思はなかつたが。某君が問句をつけた一。私は某君の問句が嬉しかった。「ふくろう」がホーホーって、静まった、舎の空気に、一層、異様な静けさを、かへた。「杜の家」でないと、例へ札幌に居ても、味ふことの出来ない、静寂である。頭が、少し冴へて来、そして、この舎に対して、なつかしみを感ずるのは、こう言った時である。落ち着いて本を読み、思索に耽り、孤独な心地で、自分を反省出来るのもこう言った時である。私は、この舎で、幾度か、十二時過ぎに、この寂寥を感じさせる、「ふくろう」の音を聞いた。そして、その度に泣でも流したい気持ちに誘はれる。朝、閑古鳥か郭公か知らぬが、その啼く音を聞き、夜は夜で、梟の啼く音を聞く。そして、彼等の方が、一層、私達の感情をいやしてくれる一。社会的な生活より、亦、自分と言ふものに、よみがへさせられる。



六月二日（火曜） ドストエーフスキーの「白痴」を読み終った。私はある新しい世界が、新しい見方があることを教へられたやうな気がした。主人公ムーシュキン公爵の美しい魂は私の心に深い感激を与へた。私は何だかうれしかった。心の内からこんこんと沸き上って来る歓喜はいつまでも止まなかった。彼は「大切な智慧」を持ってゐなかつたが「大切な智慧」の方は誰よりもすぐれ秀でてゐた。世間一般の人は、「大切な智慧」をふりまはして得意になってゐるものである。私は公爵が「大切な智慧」を世なれない真摯な一何な性格を通して吐き出すのを随所に見た。某所にはいくらいぢけた心の人をも信頼、誠、純情に呼び起さずにはゐなかつた。自分の心だけでなく人の心迄も神になす彼の智慧はドストエーフスキーが理想のものとしたといふことである。私も又、彼により人間の心の中の神を呼び起されたところの一人であつたのである。予科生試験勉強に忙しさう。（渡辺）

六月三日 晴 落ちつきたいと思つてゐても、晩になるとやっぱり浮き浮きしてくる。Kさん、K君にさそはれて町へ出る。オリンピヤに三十分ばかりねばり、クリーム二杯なめて帰る。つまらなかつた。昼、植物園で健サンと一緒にゐた。チューリップの咲き乱れる花壇の中で、ドストエーフスキーの「白痴」の話聞いた。昨夜おそくまで菅沼さんと論じた。結局僕の方が叩られた形になつたが、面白かつた。久方振り溜飲が下る思ひがした。白崎。岡本、中安、島松へ出発。

六月四日 雨 此の頃よく「赤裸々に接しなければならぬとか、真実の声を出して呉れ」とか云ふ言葉を聞く。この日記にも時々見受ける。然るに、実際には二、三之を聞き、見るだけで少い。事実皆明ら様に語つて呉れる事を望んで居るとしても果して思切つて話した時、よい結果を齎すだらうか。話すにも程度があるし時と場所がある事は否めない事ではないだらうか。明ら様に言ふ事がよいと言つた所で、無暗に言つたなら期待する物は得られないだらう。それはもう当り前の事で改めて此所に書く事もない。でも吾等は現在で満足して居ない。私達はそれを話すよい機会を得るため、造るため研究して見るべきでないだらうか。月次会をどうにか出来ないだらうか。中村

六月五日 晴 今日一日実に気持がよかつた。木々の間から青空をながめて居ると、うっとりとして来た。夜も又町へ出たくなつて来た。予科試験近づく。土居

六月六日 三日見ぬ間に札幌はすっかり夏になつたやうだ。中村の日記を見て、二つの異つた感じを受けた。即ち、その一つは、「成るほど」といふ感じであり、外の一つは、そういふ考え方が現在の社会にはあまりに多く、すくなくとも学生生徒の時にあつては、そのやうな態度はとるべきでないといふ感じである。今日、白崎と二十分ばかり話した。白崎は「俺達をもっとあまへうる（と云ふと少し変だが）人がゐない」と云つた。まったく同感であり、前から自分も感じてゐたことである。僕をよく分つてくれる人がほしい。菅〔菅の誤り？〕沼さんの口のうるさいのは、性質だから、と云ふ人達は、それと同じように黙つてゐる僕をも分つてほしい。岡本

六月七日 日曜日 晴 「若しも試験が無かりせば憂世の春はのどけからまし」。一日中穴蔵の如き舎内で試験の勉強。明日からいよいよ試験が始まる。植物園は今日も人が多いらしい。嬉しげな笑いや、小供のさはぐ声が聞へて、落着かなかつた。木の葉やうやう

新緑の此の日曜に籠城なんか似合わない。ほんとうに前書の歌の感を深くした。五号室 横田

六月八日 月曜日 今日より愈々予科一、三年の臨時試験が始った。二年は来る十八日からだ。一、三年目の人々の結果はどうだったろう。よからん事を祈る!!赤裸々な生活、それは全く賛成だ。我々の生活はそうなくては嘘だ。併し寄宿舎の欠点は、舎生一同が一応は尤な言を吐き自分の理想を述べる。そして誰しもそれに同意する。だがそれだけに止まって居る。果して積極的にそうしようと努めてゐる人が有るか。私は此に対して深い失望と憤りを感じず。此の日記にしてみても一部の人は此に対して或る重大な役目を要求し強制してゐる様に思はれるが、皆の取る態度は余りにも良心的でなく責任感の無いものゝ様に思はれる。前者自身に於てすら私は舎に対する深い愛情を見出す事が出来ない。皆のやってみる事は唯表面的、形式的なものに過ぎない。勿論私もその一員かも知れないが一。入舎当時は孤独から離れた喜びで唯盲目的に舎生活、団体生活の感激に浸って居て真の生活を見る事が出来なかった。今冷静な立場に立って静かな私の心の奥底に映って来た生活そのものゝを深く考えてみた。私はそこに醜い、様々を見出したのみだった。本当に寄宿舎を思ふ人が余りに少な過ぎる否居ないかも知れない。それで赤裸々な生活が送れる筈が無い。皆の者は寄宿舎の為により一層積極的の行動をとり、舎の欠点を一蹴して欲しい。一寸思ひ附いた事を記す。 中安

六月九日 火曜 昨夜の雷雨で今日は天気が良くなるかと思つたら、矢張り曇天だ。天候が良いと、比較的、学習が手につかないから、試験中は、お天気が悪くてもよからう…とは、少々自分勝手な言葉だ。蝉が鳴いたり、蛙の音が聞えて来たりして内地の夏のやうな気分がする。大工さんに鑿と鉋が、つきもののやうに、学生には試験がつきもので、只今、自分も試験準備でハッチャキになって居ますが、今頃のやうに、気候の良くなって来た時に試験があつては、頭の働き方が鈍って来て困ります。其の上、緑の葉陰を、美しい容姿の人々が通ると、その方に気を惹かれて、勉学の進捗上相当の悪影響を被りますが、自己の進路に横はる誘惑を排除する力に乏しいのを痛感し、慙愧に堪へない。馬鈴薯も、地上に三寸程伸びて来て、皆の丹精の甲斐があつた。 (秋葉)

六月十日 (水) 予科一、三年の試験も今日で終り、今夜はどんなにのんびりした気持であることだらう!! 試験中の予科生の姿を見ると、たとへその試験が必然に迫られての勉強であっても、何か真剣の色がみえ、真の学生の姿と云ふものを感じず。我々は常に学問の真理なり、生命の真理なり高いもの、崇なものを真摯に求めて止まぬ生活をしなければならぬ。我々各人がかく精進するとき、伝統ある北大生の青年寄宿舎としての真の雰囲気を作ることが出来ると自省してみた。赤裸々云々と云ふことが多くの舎生の叫びとなって来たのは、その意味で舎の為に喜ぶべきことであると思ふ。併も、我々はこゝで更に深く反省して見るるとき、抽象と具体は、一直線になつてゐても、それは百八十度回転して一直線になつたものであり、我々の行為は外力のみでなく内力との総和によって動くものであることであることを考へる必要がある。赤裸々の生活がほしいといふだけでは、未だ、実現には百八十度の角度がある。思ひつめ、考へつめ、悩みつくり、真に餓へるものは、叫びを止めて、如何にして充たすか、と方法、手段を考へ、自力にたよるであらう。而して始めて、他から与へられるのである。常時、情の動くまゝに従ひ、瞬間的の快樂に耽り、歡樂極まって生じた哀情により、一時の感傷によって叫ぶべきでない。反省と思索を深く

し、その儘きて行為となって現はれるとき、同時に迸る叫びでなくてはならぬと思ふ。近づく本科最初の試験を前にして、舎生諸君の日記を概読して、思ひつくまゝに書いたので、はなはだ意を満ため日記になった。

十月〔六月の誤り?〕十一日（木）晴 近頃日誌を見なかったが、「赤裸々なる行為」について大部議論が各人から出て居る。この事は前々から舎生活の改善の最大の項目となつて居た問題である。皆この事について舎生として一応書いて見て貰ひたい。

学生生活といふものは明らかに社会生活とは異つて居る。だから学生生活をして居る以上、特に寄宿舎生活等をして居る時には社会生活等は考えるべきではない。眞の学生としての生活をすべきだ。それなら眞の学生生活とは何であらうか。それは互ひに修養しつゝある者の眞面目な生活だ。それは心の修養と体力の修練の生活である。心の修養をするには先ず自己の良心を欺瞞してはならない。と同時に他の人の良き所をとり、悪しきを捨て、それにより自己の良心に恥じない行為をとらねばならぬ。意識的に善と悪とを延ばすは愚である。「他人の振り見て吾が振りなほせ」とはある偉大なる道德者の云つた事である。とかく人間は明らかに自己といふ者を掴むといふ事は難かしい事だ。その意味に於て赤裸々なる行為をする事は大切である。何故なればそれによって他人に教へられ又自分で反省し又学ぶからである。学生生活のもっとも大きい目的たる眞理探求も自己の確立が先決問題である。自己なくして探求はない。舎生諸君。互ひに個性を延ばしながら理解し合つて寄宿舎の為につくませう。(小林)

十月〔六月の誤り?〕十二日（金）晴 朝から晴れ渡つてゐて、のどかである。新聞を見ると又々皇軍の大戦果が発表されてゐる。「東太平洋の敵拠点を強襲」といふ見出しで、第一面を飾つてゐる。ミッドウエー、アリューシャン列島の敵拠点、ダッチハーバー並に同列島を急襲し、海上及航空兵力並に重要軍事施設に甚大なる損害を与へた模様で、ミッドウエー沖の大海戦では、米航空母艦エンタープライズ型一隻及ホーネット型一隻撃沈、飛行機約百二十機撃墜、ダッチハーバー方面では、大型輸送船一隻撃沈、飛行機十四機撃沈の大戦果を挙げてゐる。だが我海軍部隊にも、航母一隻喪失、同一隻大破、巡洋艦一隻大破、未帰還機三十五の損害がある。尚、陸軍部隊は、アリューシャンの要点を攻略してゐる。我が捨身の戦法の妙と豪胆なる海鷲の奮戦と相まって此の戦勝はなしとげられたものであり、我が制圧圏は遂にアリューシャンより南濠にいたる全海域となった。此れにより米の北方侵略線は崩れ、此の地を対日進行基地と見做してゐた米国にとって今回の奇襲作戦は事態を顛倒せしめ、アラスカ、カナダ海岸一帯を我が攻撃の脅威の下に曝したものであると思ふ。

六月十三日（土）晴 お祭りが近づいた為か町々が活気づいて来た様な感じがする。小林君が兵営生活の為旭川へ出発された。お菓子の配給があつた。夜はおはぎがあり、量も多く、大変うまかつた。(岩瀬)

六月十四日（日）曇 明日は札幌神社のお祭りといふので仲々今日にはぎやかだ。ゆふべのおはぎの御馳走に続いて今夜のおすし、スゴし。お祭りは明日からだといふのに、食ふことは早い方がよい、それが消化してエネルギーを出すのは、今日食へば明日あたりだらうから。他人がぐるぐると自己の廻りをかけまわり、わめき、泣き、よろこびしてゐる

のをぼかんとながめるのは何とおかしなことだ。伸びんとする時、ちっとしなければならぬ。蚕は大きくなる時脱皮はするが、その時は眠る。そして静止してゐる。

(太田生)

六月十五日 (月) 曇 札幌の祭も第二日目を迎へ、仲々の人出であった。学校も午前中で午後は自由参拝といふ形で休業。札幌は祭りの頃が一番良いとは前々から聞かされてみたが、本当に良い。午食をぬきにして、夕方六時美食出た会食を成す。岡本さんの熱も下った様だ。予科二年の試験も近づいた様だ。舎の内には別に変わったこともなく祭といふのに至って平凡であった。(北野〔二、三字不明〕)

六月十六日 (火) 曇 お祭りも三日目少々飽きて来た。創成川の方等には行く気もしない。気候が良くなったせいか、テニス、ピンポン等に興ずる人が多い。結構なことではある。アカシアの花も咲き出した。此の良い天気にも二年目は試験とは気の毒な。それにも構はず、夜さわがしいのは何としたことか。夜は各々勉強に読書に思索に、さては睡眠に用ふべき時である。副舎長の掲示もあるのだから静かにしてほしいものである。ダベリマンにはダベリマンとして道徳があるはずだ。六月も下旬になった。つゆがないのが何となくさびしい様な気がする。燈に向って色々な虫が飛んで来る。札幌にも夏が来た。かわづの聲がかしましい。(大泉)

六月十七日 水曜日 晴→雨(三時頃から)→晴 今日ハ天気が良い。青い空、緑の木、芝生…何と言ふ美しい大地だらう。我々ハ札幌に居る間だけでも、牧場の影響を充分に受けて置きたいものである。青い空ハ、気持をさわやかにする。緑の木ハ、目を休め頭の疲れを癒す…柔らかな芝の感覚ハ、体の内を駆け廻る。…そうして、小鳥の声と、木々の触れ会ひの音が、世間の声を、遠ざける。遂にボーツとして、寝って〔一字不明〕ふた。(三村)

六月十八日 木 快晴 暑し。予科二年試験。太田君支笏湖へ行く。皆で舎生活、学生々活と愉快に送れる様に努力しよう。(三宅)

六月十九日 金 曇・雨 小林茂君帰舎ス。(菅沼)

六月二十日 土 山根副舎長旭川に、三村君支笏湖へ。予科二年生試験終ル。一年生諸兄、島松に、太田君夜帰る。

六月二十一日 日 日曜だが、予科一年生がごっそりと、副舎長山根君も留守で、それに支笏湖に、気晴らしに行つてゐる人間もいるらしく、舎内は静穏。ただ、夜、ピンポンをやる人間多し一余もその一人なり。六月の二十一日と言へば札幌では最も気候の良い時。舎の中で日曜の一日をくすぶらねばならないのは、条件を挙げれば、沢山もあらうが、第一は、食糧の問題である。御飯がないからである。この気候の良い晩を、読書に、思索に、勉学に費したい。だが、朝、ひる、晩と三度の飯も充分に食へない所から、夜になって、昼の疲れがどっと出て来て、駄目だ。試験をやつてゐる人達はさぞ、痩せることだらう。男も一人前になると、一日五合位の米が必要だ。空腹は、油脂(あぶら)ものを食ふ方が、炭水化物や、蛋白質、澱粉を食ふより、しのぎ易い筈だ。近頃は天ぷらの「て」の字も見ることがない。Wein, Eveiss〔?〕 und Gesaugも、今では、味噌汁、米、うどん、志るこなんて言ふ様になり相だ。以上(望月記)

六月二十二日 月 晴 終日何事もなし。

六月二十三日 火 晴 予科一年が島松から日焼して帰つて来た。あつくも涼しくもな

いよいよ天気。この二三日、明日の演習のために消火訓練が行はれてゐる。日本潜艦のアメリカ砲撃。

六月二十四日 降りや降らずやの日が続く。異常なし。

六月二十五日 日本軍のキスカ、アッツ両島占領に関する大本營の発表あり。十二日、アリューシャン方面作戦を発表して以来一億国民のひたすら待つてゐた感激の第一報である。吾々はこの戦果を喜ぶと共に冰雪と濃霧そして峻峰等を占領し、よくその任を全うする勇者達に心から感謝の祈りを捧げやう。白崎

六月二十六日 金 曇 此の頃は天候不順である。学校ではまだ田植えして居る。特に此の頃総ての人に親しみを感じずる。(中村)

六月二十七日 朝からいやな天気であつたが遂に雨が降り出した。予科は雨中を、体力章検定会が開かれた。誰も二千米が最難関らしかった。(土居)

六月二十八日 本日晴天ナリ。対高商戦十二A対四ニテ予科大勝ス。予科生ノファイティングスピリット高商ノ術ヲ破ル。舎の外の人々はどうしてこの日曜日を送つたらう。岡本

六月二十九日 月曜日 晴天 朝八時眼がさめたら机の上に乾パンがごっそりとおいてある。棚からボタモチと云ふけれども実に変だ。二日続いてゐるので気味が悪い。誰の悪いたずらか、中安さんにしても己にしても全くわからない。そんなにぞっこんホレラレタメツチン〔メツチェン〕も居ないのに。

六月三十日 火曜日 本日は月次会。七時頃から開始、国民儀礼に引続いて舎生の演説があり、烈々たる語気を以て自己の意見、感激を堂々と吐露開陳したのは実に立派なものであり、青年の意気を示したものと云へよう。宮部先生、時田先生、亀井先生、大貫氏が御出で下され、夫々有益なる御話をして下さった。九時頃より、茶菓の饗応に移り、先生方と一緒に苺や和生菓子を御馳走になり、十時頃閉会。宮部先生には、今日の月次会の盛況に、殊の外御満足であらせられたやうに拝察する。

七月一日 水曜 晴 今日も良いお天気だ。空に浮ぶ白雲は美しい。太田、望月、飯島の三君、島松野外教練へ朝早く出発。白崎健蔵君退舎。(秋葉)

七月二日 木曜 曇 舎内平静、静かな晩だ。どこからともなくギターのかきならす音が聞へて来る。外では蛙の声がする。ふくろうの声もうつろなひびきを伝へて来る。何故か故郷が懐かしい様な気がして来る。ずっと目をつぶってこの音を聞いて居るとたまらなくやるせない気持ちがある。近頃柄にもなくセンチになるなんて実に不可解だ。今日テニスコートで札鉄の人達がバレーをして居たが、五時、六時迄もキャアキャア騒がれたのには閉口した。規定は一時から二時迄といふ事になって居るのに五時、六時迄騒がれたのは不愉快だった。何とかならないものだらうか。(小林)

七月三日 舎のおばさんが寝つかれた。御産をされるのも近いのだらう。今日から当分の間、舎生が交替々々に炊事をする事になった。(内田)

七月四日(土曜日) 予科二年目実砲射撃あり。昨夜より警戒管制発令にて真暗である。本当に夏らしくなった。(兼平)

七月五日(日曜) 晴暑し 内田君、中村君が島松野外演習に早朝出発す。今日の夕食は見事な出来で非常においしい夕食だった。製作者太田、北野の両君なり(自画礼讃)(岩瀬)

七月六日（月）曇暑し 夏だ夏だ、暑い暑い。気持の良い、快適な暑さである。舎生が炊事するので仲々愉快である。おばさんの日頃の労苦今察せりである。今日は何が現れ出づることぞと待ちあぐんだ。タコの豚汁（実はタコで製法は豚汁）なり。秋葉、小林、兼平の三君の力作、うまし。大いに栄養を摂り大いに頑張るのだ!!

雲の動き活発、雨来るを思はせる。もう相当長く晴れたから、こゝらで一吋降らしたい。蛙の声がにぎわし。（太田）

山根、三宅の両君は陸軍獣医依託生に望月君は海軍軍医依託生に合格、めでたし。大いに祝すべし。先づ御馳走になってから一

七月七日 秋葉さん、江別に出発、十四日帰舎の予定。夕刻、テニスに興じたり。三村

七月八日 水曜日 小雨後晴 中村、内田両君、島松より帰舎。テニス、ピンポン中々盛ん。夕刻から暑さそれ程でもなくなる。「牧笛」が何処かで沈没したらしく未だ廻って来ない。大泉

七月九日 木 晴 夜雨を聞く。舎生の賄手伝ひ続く。小父さんの話に依ると、小母さんの病気も、経過良好で、十三日から仕事を始めるとの事。だが此れからもかゝる事はちよいちよいある事と覚悟せねばならぬ。学部生の海軍講座、三日間、本日で終る。あまり面白い話でなかったが、幾許かの収穫はあった。 三宅

七月十日 金 晴、雨 夏休みも近ずき、舎生思い思いのプランに余念なし。明日の山根御大送別登山、突然に予定変更となるらしい。出来るなら強行登山でなからん事を。菅沼生

七月十一日 土 時々細雨あり。梅雨の様な此頃の天気。東條首相来校し訓示あり。山根、渡辺、三宅、望月、北野、土居、大泉の諸兄午後から勇躍札幌岳一空沼に向ふ。小林君実習に行く。 飯島

七月十二日（日） 今日少し曇り勝ちな天気である。午前中、昼の間は、舎内は割合に静かであったが、午後七時頃、登山に行った一行が帰って来て、舎内は賑やかになった。皆元気一杯であり、疲れた様子は見えない。（内田）

七月十三日（月） 昨夜の朽桃でおなかを痛めた人が、ゐるらしい。北野君寝てる。夏休みが近いのと気候がいゝのところが一緒になってどうも落ち着かなくて困る。（兼平）

七月十四日（火） 急に雨が降り出してびしょぬれになって帰って来たらしかった。秋葉さん帰舎す。（岩瀬）

七月十五日（水） 朝七時半、梶田君帰省す。天気続く。気分よし。皆元気。（太田）

七月十六日 朝曇、ひるから晴。夜九時にて北野帰省。

七月十七日 金曜 晴 学部査閲、午後五時から「蝦天」で離別コンパ兼依託生合格披露を行った。六時も半に垂んとして内田君到着。大いに食魔の気炎を上げたが終に飯が残った。席上出張中の先輩に寄せ書きを送った。帰省した人や実習の為に欠席した人が居たのは残念であった。寄宿舎も帰省が近づいた為か何となくあわただしい。札幌にもカンカン帽の季節がやって来た。（大泉）

七月十八日 土曜日 曇時々雨降る 舎生の帰省相継ぐ。土居、岩瀬、夜望月、学部生のトップを切って帰る。本日著しく気温下る。（三宅）

七月十九日 日曜日 曇・晴天・曇・雨トナル 六時ヨリ（二十日マデノ）決算ヲス。中安君夜帰ル。兼平、岡本先ニ昼ニ帰ル。

七月十九日 快晴 夕刻太田隆三君に教育召集来る。早速飯島君は公区長を訪れ特配を受けに行く。明晩は盛大なる壮行会開催予定なり。太田君は早速舎長先生に御挨拶に行く。

七月二十日 晴一時雨 飯島、菅沼両君の大奔走と賄班の熱意とにより、午後五時太田隆三君の壮行会開かる。在舎生九名皆出席にて、天婦羅に舌鼓を打つ。砂糖の煮豆も出た。之は、菅沼、飯島君が、召集だと云ふので早速公区長から特配を受けたものである。午後七時、太田兄、肩から下げた得意の団囊も颯爽と、多数見送と萬歳に送られて壮途に上る。入隊は、青森県中津軽千歳村北部十六部隊なり。夜ピンポン興ずる者多数。

七月二十二日 秋葉君狩太へ実習に出発す。

七月二十三日 秋葉君より御便頂く。

七月二十四日 (金) 中央講堂にて平出大佐の講演を聴く。

七月二十五日 (土) 晴 太田兄より便頂く。

七月二十六日 (日) 小林君帰省。三村君支笏より帰舎。菅沼、三宅、山根は錢函へ。三宅、菅沼夜汽車で出発。

七月二十七日 月 小雨晴 三宅、菅沼不在で急に淋しくなったが、大泉帰舎。夜は映画に行くものあり。北野君より音信に接す。

七月二十八日 (火) 晴 中村君合宿より帰舎す。

七月三十日 夕食後、残留舎生総出でテニスコートにて剣道大会を開催す。さすがに初段飯島君の腕は、神業に等し。内田君巨軀を躍して猛然と取りつくも、遂に刀をはたき落さる。三村君第一回戦にて、腕に負傷し実力を発揮出来ず。健さん、飯島指南番の才面を一本とって得意満面なり。夜汽車にて内田君樺太へ実習に出発す。

七月三十一日 晴 昼、山根さんが依託生訓練の為旭川に向はれたので舎が又一段とさびしくなったところへ、大泉君も急に今夜帰省したので層々さびしくなってしまった。

八月一日 快晴 甚だ良い天気。暑気身にしむ。

八月二日 曇 舎内平穩。全員四名にて、寂りょうの感深し。午後七時、公会堂にて八田大臣、安倍大将のお話あり。雨にぬれて帰へりたり。講演とハ、何が故に、かく、吾人に眠たきことを要求するや。

八月三日

八月四日 望月先生帰舎す。賑になりたり。

八月五日 晴 旭川の諸兄より便りあり。

八月六日

八月七日 菅沼氏より手紙来る。戸田来る。四人で宮部舎長訪問。先生のお孫さん達来札。

八月八日 夜ピンポンす。大招奉載日。

八月九日 中村卓三君、最後の帰省の途に立つ。余と飯島君と、踏切で見送る。

八月十日 飯島君、床に臥す。頭痛と下痢のためらしい。早く全快することを祈る。渡辺君より便りあり。小生夜映画を一人で見に行く。

八月十三日 秋葉君帰舎さる。御菓子を貰って、吾等大いに喜ぶ。

八月十四日 渡辺君夜帰舎さる。猶ほ、十二日よりの警戒警報、本日解除さる。舎生一

同、安堵する。夜、小生を入れて、残留生三人、映画「白鷺」を見に行く。以上。(望月記)

八月十五日 札幌は今日がお盆だと学校で聞く。雨曇りである。頭がずっと晴れやかにならない。寄宿舎の三人の生活も今は五人となり、大いに賑になりたり。余も、今後勉学に勉学にと精励したい。「勉強は心の逃避場である」と言ふやうにならない迄も、そうなたら、或は理想であらう。日本人的性格は小我を否定して、一つの道に精進する所にもあらう。芭蕉の俳諧に於けるが如し。然し、余には、学にのみ没頭することの出来ない心の頼りなさがある。永遠に生きる我と、生きない我との二つが心に宿り、互に反発し、撞着する。学問に没頭するとは学問を通して、国に報いんとする、信念を意味する。然らずんば、学問は何のための学問か分らなくなる。

八月二十二日 土曜 晴 残暑割合にきびしい。夜少時、灯火管制行はる。

八月二十三日 日曜 小雨 防空演習の予行行はれる。

八月二十四日 月曜 雨 一日中雨に降られる。医類一年川瀬君入舎。

八月二十五日 火曜 晴 三時半、うすぐらきもやを破って、警戒警報の音が静寂を破る。中村君が先ず起きる。ねむい。無理して支度する。電燈がつけられないので暗中模さくの文字通りを演ずる。やがて空襲が発令さる。敵機々々の声が辺に飛ぶ、響く。正に実戦その物なり。岡本、中村、楨田、北野の四君が活躍する。渡辺さんが、応援兼激励に出て来られた。山のはに、紫のたなびきたる、いとよし。それが、だんだんにだいたい色になり初めて雅〔?〕の調べが心に響く。北の都の朝まだき頃を諸君にも観賞せられん事を望む。舎の附近には、敵機何物も落さず平穏なり。夜灯火管制あり。飯島さんは明日試験と聞く。三村さんと共に張り切つてゐる。

八月二十六日(水) 曇 六時起床、台所の炉には既に火が入つてゐる。洗面所の窓を開けたら涼しいと云ふよりはそろそろ冷くなった空気が流れ込む。此の頃は特に天候不順、作物が気にかかる。各科とも夫々試験も近づき段々臨戦態勢に入つて行く。放課後、室に帰つて机の上の御菓子を見、皆思はず微笑む。今夜はもう遮光を要しない、生々する。

中村

八月二十七日(木) 曇 渡邊さんが、急性腸胃カタルとなつてくるしさうだ。医者が来て診察するが大したことはないさうである。早く直られんことを祈る。大分夕方迄には楽に成つたさうだ。朝早く、山根さんが帰つてこられる。大分久し振りで合つた。日にやけて、近き日の若き中村殿を思はせる。軍隊の話、馬の話…話のはづみ、賑やかだ。暗い舎も急に明るく成つた様だ。三村さんも愈々試験近づき拍車をかけてゐる様。予科最後の試験を頑張つてもらい度い。他に變つた事なし。

八月二十八日(金) 雨 山根さんが帰へられた後、菅沼さんと三宅さんが来て居られない。その中に来られる由、矢張り皆な揃はないと何となく淋しい。小林さんと内田君が帰へるのは何時頃か、さっぱり音信なし。此の頃はどうも晴々れしない天候、そろそろ晴れて呉れるといゝが…。 中村

八月二十九日(土) やつと雨と縁が切れた。全くすべての物がじめじめして来た。今ノミに悩まされて居る。三村さん、今日より予科最後の試験が始る。夜町へ出ると雨からのがれ出した人々がわんさと出て居る。(土居)

八月三十日 やつと天気になつたと思つたのも束の間、昼頃から曇天になつてしまった。もうそろそろ秋の気も感じられる頃となつたのに、いつまでたつても爽やかな日光が見ら



れないのは残念である。昨日三宅さんが帰舎されて、また一人人数がふえて話ははずんでゐる。

九月一日 本朝小林君帰舎す。菅沼、秋葉、渡辺、三宅の四勇士旭川の軍事講習に出発。

九月二日（火） 朝窓をあけると冷へた空気が部屋に流れて来る。札幌の秋は早い。昼頃はすこし汗ばみ、過ぎんとする夏の思出が一寸浮んで来るが、それもすぐ消へさり、人々は秋の準備を始める。

九月三日（水） 相変らず防空訓練が盛んである。ボンボン爆弾や焼夷弾が落ちる。銃後の婦人がかくの如くきびきびと訓練されて居るのを見ると力強く感ずる。

予科も本科も実科もそろそろ試験が迫って来たので皆忙しいらしい。（小林）

九月四日 木 近頃、独軍のスターリングラード攻圍作戦は著しい進捗を示し、著〔一字不明、Rか？〕包圍圈を圧縮しつつあり、陥落も真近な感がある。

九月四日 金〔日にち、曜日はこれ以前が誤りか？〕 四時頃よりテニスコートにて、山根、飯島、北野、土居の諸君、剣道の試合をす。飯島君断然強し。防空演習も終り静かな夜であった。

九月五日（土）晴 予科、第二時限後、明日の防空演習の予行あり。午前中にて終る。午後、岡本君、土居君等テニスを為す。夕食後、しるこに舌づゝみをうつ。皆その甘さに驚く。

九月六日（日）晴 日曜日であるが、防空演習の為張切る。時局の進展と共に此の方面の活躍も著し。学校の方も亦町も実戦そのものなり。快適に晴れて秋の感一入深きものあり。山根さん、小林さん、卒業試験近づき、忙しさう。学生時代最後の試験に心をきなく頑張ってください。 北野

九月七日（月）晴一寸雨 朝四時から又空襲警報発せられ、六時近く解除、これで数日に亘った防空訓練も終った。此の頃は試験も近づいて来たためだらう。朝早くなって来た。そして秋色濃くなり、朝夕は大部冷える。農類二年澤井さん恵迪寮から舎へ移転して来られた。

九月八日 曇（火） 午後予餞会あり。山口先輩、病重しとの報に接し驚く。山根副舎長、見舞に行く。全快せられんことを本当に心から御祈り申し上げます。夜、来る十一日の山根、小林両兄送別会のプランをねられる。平凡ならざりし一日であった。（北野）

九月九日（晴後曇） 予科査閲の予行あり。午後から夕立が来て相当ぬれた人も居た。明後日の送別会の準備が行はれた。（土居）

九月十日 舎内平穩、何事もなし。剣道に親しむもの四名。曰く秋葉、土居、内田、岡本。去年は今日まで休であったかと思ふと、忙然たること多時。変れば変る人の世の姿。来年はどうなることやら心痛の種。鬼が笑ってもよいから休はありますように。されば、あに我一人の喜びのみならんか。試験が近づくと、本が読みたくなり、いろいろな考が頭にうかぶ。試験のないときは読みたくもないし、なんの考へも浮ばない。皮肉なものである、とは試験のたびに思ふことである。 岡本

九月十一日 雨ガ降って心がめゐる。此処へ来て、もう四日になる。くらい部屋の中が尚くらい。一人新参者がくらい部屋の中で考へてゐると、雨の音が気にさはってしやくの

種だ。今日は、送別会である。出る者と入った自分との異った心理状態一入舎の挨拶をせよと云はれたが別に今日、よりもよって送別会の時にする必要がないと思った。

九月十二日 一日晴天。菅沼さん学校より馬に乗って来る。三村さん始めての名タヅナサバキと大自満。土曜だと云ふのに予科試験期近ずきたれば音癡振りを發揮してゐる。他に変わった事なし。横田

九月十三日 日曜 晴 晴天なので山根、菅沼、三宅、飯島、三村君と六人で遠足に出かけた。日曜のためか、街の人達も澤山遠足に出かけて居った。十二軒家を経て隋道を通抜け、小別澤へと向った。秋の野山を跋涉するのは、実に良い気持がする。発寒川の支流の川岸で、飯にしたが、先着の人々が澤山陣取って、炊事をして居った。吾々は、途中の農家より、西瓜を買って行って、腹一杯食った。秋は伯(叔)母の許へ行くよりも、寧ろ、野へ行けとか言はれて居るやうに、食物が豊富にある。帰りに、隋道の附近の小高い丘で、しばし休憩した。緑の草原に仰向きになってみると、紺碧の空を白い雲が流れてゆく。実に長閑で、戦争気分は少しも感ぜられない。楽しい一日の遠足も将に終らんとし、西日に照らされながら電車の停留場へと下りた。(秋葉)

九月十四日 (月) 晴 試験が段々近づくので舎内静か。山根先生本日で学生生活最後の試験を終へ愉しさう。小林、三村君と三人は天下泰平。

九月十五日 (火) 晴 愈々試験が近くなったので、皆勉強に夢中らしい。舎内静かで変わった事無し。

九月十六日 (晴後雨) 水 愈々此の日記へ書けるのも今日一日。未だ本当に札幌を離れて行く様な気がしない。この舎の人とも会へないと思ふと寂しい様な気になる。二年半の間この寄宿舎に御厄介になったが今日此れ位になれたのも全くこの寄宿舎及び舎長先生初め諸先輩並びに舎生諸君の御厚情の賜であると深く感謝して居ります。寄宿舎も既に四十三年の歳月を経て今日これ迄の発展をとげて来ました。これは舎生諸君の理解と尽力と誠意によって更に更に向上発展するものであると思つて居ります。寄宿舎の御発展と御向上を祈つて止みません。終りに臨み送別会並びに壮行会をわざわざ私の為にかけて戴いた事に対し深く感謝致します。では皆様、元気で征つて参ります。(小林)

九月十九日 夜小林君入営のため帰途につく。公区の人々は旗を先頭にして駅迄送つて下れる。駅前にて送別ストームをやって、同君の御多幸を祈る。

九月二十日 予科、実科試験近づき皆一心に勉強する。他に変わったことなし。

九月二十一日 愈々今日から予科は試験なり。出来ばへは如何に・すべり出し悪くくさる。他の諸氏や如何?実科の人達は十時頃から試験なり。試験第一日目は試験以外の人には平凡なりし如き一日なり。

九月二十二日 今日も亦同様。皆張切つて出て行く。別に変わった事なし。予科の方は大体ヤマを越したの感あり。

九月二十三日 のんびりして試験に向ふ様な様が感ぜられる。他は平凡な一日。連日の失敗に筆者は大いにくさる。

九月二十四日 今日は秋の彼岸の中心である。暑さ寒さも彼岸迄とか。これから愈々寒くなるだろう。試験なかりせばの嘆息続く事しばし。

九月二十五日 試験も四日目となると心臓が馴れて何くわぬ顔で学校へ出かける。明日一日で試験も終りか。町へ出る者多し。

九月二十六日 予科生万才。コンデは取っても意に介せず。秋を我がもの顔に、張切って町へ出る。槇田、増原君、阿寒へ出掛ける。予科は九月三十日迄休みなり。思つてゐたより少くて少しく落胆する。土居君早速家に帰る。母様の乳を一杯のんでいらっしやい。夜、大泉、北野、宮部先生を訪ね、話題のなかつた事に大苦勞を演じて帰ってくる。実科は二十九日迄試験が続くのだ。何かしら、いたましいが、その後には太陽が照つてゐるので。

九月二十七日 今日は実科も日曜なので休ミ。中村君は、試験中にも拘らず、射撃の選手なりに依つて月寒へ出かける。

九月二十八日 平凡なる一日。舎に変わった事なし。

九月二十九日 実科も試験終る。皆万才なり。山根、飯島、大泉、北野の四君で” オイランブチ”に出掛け、夜帰つて来て、ストームをする。部屋更への新メンバー発表さる。

九月三十日 休ミの日は又一層速く去る。川辺さん、舎を体の都合上退く。健康を祈ると共に御指導を御願ひするや切。コンパを行ふ。槇田退舎する。舎も淋しくなつた。

十月一日 愈々第二学期始まる。三村新角未だ来札せず。菅沼、三宅兄も舎に戻らず。望月兄も亦然り。夜、山根、渡辺、飯島、大泉、土居、北野の諸君で宮部先生宅を訪問す。〔欄外に追記〕宮部先生、書物を寄贈サレル。

十月四日 宮部先生、本を舎に御寄贈下さるとの報に接し、山根、飯島、土井〔居の誤り?〕、北野の諸氏、頂きに行く。何と四十五冊なり。各、先生手づから署名して下さる。感謝して読むべし。

十月三日〔ここから二日間、日にちが逆行〕 三宅、望月兄、相次いで帰舎。舎の内一時に賑はふ。他に変わった事なし。

十月二日 変わった事なし。

十月五日 舎の書籍も大体整理出来た。大いに読むべし。

十月六日 七日、八日が全学会の為皆張切る。楽しさう。三村君帰舎。〔特別記事〕舎の先輩として、その科学者としての態度と共に諧謔を交つたる会話で、舎生の敬慕のまゝと山口先輩は、宿痾の為、終に十月四日死去さる。人の世のならひとは云ひ乍ら、此れ以上の悲痛事があらうか。然かもこれからと欽慕せられし先生の死は…。舎では山根、望月、内田の諸氏が通夜に行く。明けて翌五日、秋雨そぼ降る日、告別式挙行せられる。山根、渡辺兄参列す。山根君舎を代表して弔辞を、つゝしんであげる。

十月七日 全学会なり。学校へ出る者少し。山根、飯島、土居、北野の諸氏、秋の薄別へ出かける。

十月八日 今日は全学会の二日目なり。薄別へ行った者夜帰る。夜、カボチャ出る。

十月九日 休ミの後の登校程いやなものはない。三村新角の新角ブリ、本当に典型的なり。

〔特別記事〕

舎の最も良き相談相手としての先輩、奥田先生に召集令状下る。度々の御召しに接せられ、舎生一同七日朝、札幌駅へ送りに行く。先生の御武運長久を祈るや切。

十月十日 すっかり雨が降つて寒くなる。菅沼副舎長帰舎。此れで大体全部揃つた。

十月十一日 寒い。火がこひしい。他に変わった事なし。

十月十二日 やっと晴れて快適の秋日和。北海道の秋に耽溺する。他に変わった事なし。長い間日誌を手許に置いてしまった。(北野)

十月十三日 学部及実科の体力検定会行はる。内田君と渡辺出席す。半数にも満たざる物淋しき検定会なり。急に二千米を走ったので仲々苦しい。ノートの良いのを見付けた学部の連中、各々買だめをして走る。

十月十四日 三日月が美しい。

十月十五日 小生の試験やっと今日で完了。夜はピンポンに興ずる音が聞えて来る。そろそろ冬の前ぶれで朝晩は大分寒い。

十月十六日 山根さんの送別会が行はれた。澤井君が試合の為弘前高へ遠征された。新潟寮との野球に大勝。

十月十七日 午前五時山根さんの送別ストームを行ひ、続いて札幌神社に武運長久を祈願し、駅迄送る。荘内寮との野球の試合に惜敗す。(岩瀬)

十月十八日 日曜 昨夜可成りの降雨があったが、今朝は雨も上った。天気は余りよくない。昨日山根さん旅立って舎に寂寥の感あり。彼の存在の如何に大なりしかを痛感させられる。一昨日、昨日の疲れの為めか舎生朝遅し。夜気温下る。火を慕ふ〔一字不明、や?〕切。未だ煙突、石炭、ストーブ等々、準備の成らざると思ふと一層寒さが感ぜられる。三宅

十月十九日 今日は朝からよい天気である。今年も又木の葉の落ちる頃となった。何故となく淋しい舎内である。そろそろストーブの欲しい感じもする。岡本

十月二十日 今日晴。少し寒い。大泉君帰舎。夜は特に寒さが感ぜられる。河瀬

十月二十一日(水) 夜、舎費決算を行ふ。記念祭委員決定。南瓜の主食あり。其の他変わった事なし。(内田)

十月二十二日 晴後雨 舎に於ける特記事項無し。夜雨が降って感じが悪いが、あたゝかい夜である。(澤井)

十月二十三日(金曜日) 夜、九時半、医化学の輪読会から、疲れて帰る。月は十三夜の如く輝く。楡の梢を通して月影を仰ぎ乍ら、帰る。夜途は嬉しい。月もなく、夜九時過ぎ、図書館より〔一字不明、あ?〕帰りよりどの位、楽か分らない。こんな月を見乍ら、歩いてみると。新渡戸先生が好んで詠まれた

見る人の心々にとどめをき

高根にすめる秋の夜の月

といふのが、念頭に浮んで来る。早くも、草の葉にたまる、露が、月の光に反射されて、美しく輝く。私は、心も身も浄化された、喜びを味ふ。寄宿は近頃、静かになって来た。ピンポンをやる人もゐない。山根、小林君も健在してゐられることゝ思ふ。秋は、感傷と、反省の時である。(望月)

十月二十四日(土曜日) 昨夜来特別に底冷えを感じて居たが、今朝起きて見ると屋根が薄く白化粧してゐた。初雪だ。雪の降るのが非常に早いやうに感じた。然し去年より二日しか早くないそう。これから来春迄、この雪に閉ざされるのかと思ふと憂鬱になる。火気がほしくなって来た。食堂にストーブを取付けるやうに掲示が出てゐたのに、取付けられなかったのは残念。寒いだけで、平穏な一日だった。(増原)

十月二十五日（日） 此の二、三日非常に寒くなってストーブが欲しかったが今日は大体附けた。然し之を使用する事は禁ぜられて居て目の毒である。台所のストーブがにぎやかだ。 土井

十月二十六日（月） 今日又暖くなり温暖の光が部屋にさし入る。菅沼先生、痔手術の為、本日柳外科に入院。夜記念祭の相談楽しさうに続けられる。飯島

十月二十七日（火）晴 今日も比較的温暖である。そよ吹く風も生ぬるい。紅葉が芝生の上へ散敷いて美しい。澤井、河瀬君、合宿練習が始まり、舎に不在。午後九時の臨時ニュースにて、南太平洋の赫々たる戦果が発表された。（秋葉）

十月二十八日 晴 本日、比較的暖かなり、三寒四温を思わせる。木の葉、大分散。落葉踏む音、又良き哉。日記が久振りにまはって来た。止めて置くとハ、けしからん。三村

十月二十九日 木 晴 何故か秋は淋しい、凋落の秋。どうも張切れないものがある。自然引籠り勝ちになって各室へも御無沙汰勝ちである。此れではならないと思つて居るのだが。記念祭近し。記念祭歌食堂に貼られた。明日より練習とか。中村

十月三十日 金 曇時々雨 記念祭歌の練習をやる。舎生五人と共にリンゴ配給をもらひに出掛けたが、品物がまだ来ないとのこと、駅前果物屋でカキの予約をして来る。石田屋では妙なフロイラインにまくしたてられて退散する。終夜設計にいそしむ。予の設計も明日で完成か。小林茂君の家からリンゴをお送り下さる。皆に分配する。 渡辺

十月三十一日（土）晴 深夜に至り寒気ますますよし。秋も暮れ、本格的な冬近きを思はせる。明日より愈々待望のストーブに火が入る予定なり。戸外は一枯枝に鳥のとまりけり秋の暮一芭蕉一といった様な風景である。 河村